

全国厚板シヤリング工業組合

切板の需要動向

(H20. 12. 8)

1. 切断量の推移

(単位:千トン)

	19年度		20年度			
	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q
	(実績)	(実績)	(実績)	(実績)	(事務局想定)	(事務局想定)
無規格	99	101	99	94	85	75
規 格	546	546	562	559	540	520
合計	645	648	661	653	625	595

(出所)実績は全国厚板シヤリング工業組合「鋼板流通調査」結果による。

2. 需要部門別動向

厚板シヤ業界の状況を概観すると、これまで堅調に推移してきた製造業の内外需環境が一変し、急速に下振れの様相を強めており、今後の切板需要への影響が懸念される。こうした中、足元の母材需給は、高水準を持続する船舶の建造活動や大型建築案件を背景に、依然タイトな状況が続いている。しかし一部店売り市場においては需給の緩みが生じている模様である。年末を迎え、資金繰り等金融不安への対応をはじめ、踊り場に差しかかっている市況の動向など、一層注意を払う必要性が高まっている。

まず需要面をみると、機械部門は、9月頃までは外需に支えられて堅調に推移してきたが、ここへきて建設機械、工作機械受注ともに、内外投資マインドの冷え込みから急激に悪化している。各機械メーカーの生産計画は下方修正を余儀なくされ、大半の機種が減産体制に移行している。鉱山機械の一部が辛じて堅調を持続しているにとどまっている。また重電分野では送電用、原発向けなどエネルギー関連機種が好調に推移している。

建設分野については、都市開発関連の大型建築案件が各地区とも引き続き好調に推移しており、橋梁も高水準を継続していることから、大手ファブは来年上期～来年度末までの手持ち工事を抱えている。この結果、ヒモ付き系建材シヤはフル操業を続けているが、メーカーロールは依然としてタイトであり、材料入手難は解消されていない。

これとは対照的に、一般店売り分野は、各地区とも相変わらず荷動きが低調で、中小のファブ及びシヤの仕事量は依然少なく、低操業が続いている。とくに、メインの中低層建築の出件は少なく、改正建築基準法施行以降、回復の兆しが全く見えない。

一方、母材供給面をみると、メーカー・ロールのタイトな状況は変わらず、とりわけ橋梁及び大型建築案件向けのロール枠の確保は、引き続き厳しい状況にある。

シャー各社は、こうした供給制約、及び急激な需要環境の変調といった状況下で、今後ともメーカー値上げ分の適正な価格転嫁に努めながら、仕事量の確保に走り回る状況が続きそうである。また、当シャー業界としては、鉄鋼メーカーの需給認識と、それを踏まえた今後の供給スタンスがどうなるのか、大いに注目しているところである。

最後に、素材厚板や切板市況の現状について付言すると、昨年末以降、市況は上伸基調で推移してきたが、今後については、需給動向いかんではあるが、ここしばらく模様眺めの展開が続くと予想されている。

なお、シャー業界における主要課題、注目点は以下の通りである。

①中小建築シャーの経営動向。

②コンプライアンス対応（独禁法、輸送条件、品質証明問題等）。

・品質証明問題については、本年3月より当工業組合内にTFを設け対応策を検討中。
鋼構造協会の委員会（官学民の三者で構成）に参画し、「新しい鋼材品質証明方式」の見直しに着手。

・独禁法遵守については指針を作成、理事長名で全組合員に周知（10月）。

③与信管理、資金繰り（個社対応）。

④母材値上げ分の転嫁（個社対応）。

⑤建築分野における鋼材とコンクリートの競合問題。

主要需要部門の足元の動向を整理すると、概要以下のとおりである。

①橋梁・建築鉄骨の動向

（全 体）

大手建材系シャーは、一部でメーカーロール起因により稼働に穴が空くケースがあるものの、各社ともほぼフル稼働が続いている。足元の在庫量も相変わらずメーカーのデリバリーが遅延しており、数量・在庫率ともにかなり低いレベルまで減少している。

今後の動向については、各社とも来年度上期までフル稼働するだけの仕事量を抱えているが、メーカーロールが対応できない可能性が高く、材料起因で稼働に支障をきたすケースが出てくる見込み。

（橋 梁）

足元FABの仕事量は充分にあり、メーカーロールさえつければ、年度内から来年度上期にかけての仕事は埋まる見込み。しかし、本年度下期のメーカーロールは大幅にカットされており、加工量はまだら模様を呈している。

(鉄 骨)

首都圏の超大型物件は大量にあり、Sファブの手持ち工事量も豊富である。ゼネコンとFAB間の価格交渉のもつれにより遅れていた、上期の首都圏の大型案件が本格発注され、10月以降大幅に増加している。

今後の展開は、工場案件の中止、延期が相次いでいるが、Sファブの稼働には今のところ影響は出ていない。このままいけば、Sファブの稼働は来年度上期～年度末までは高水準が続く見込み。

一方、鉄骨需要を下支えしている中小建築案件は全国的に低迷している。計画の見直し、工事の延期や中止、他工法への変更等により、中小FAB向けの物件は少なく、ユーザーの買い控えもあり荷動きは閑散としている。

②産建機・重電・金属工作機械の動向

(産建機)

昨年まで続いた全機種にわたる拡大基調に大きな変化が生じている。金融危機に伴う世界経済の減速が機械部門全体にも及んできており、実体経済への影響がいよいよ肌で感じる事態となってきた。

建設機械は、日本建設機械工業会統計によると、9月の出荷は前年比9.8%増となり、うち内需は6.8%減、外需は20.4%増で、輸出が牽引した。トラクタ、建設用クレーンをはじめほとんどの機種がプラスであった。統計面でみても9月までは金融危機の影響はそれほど表面化していなかった。しかし、10月以降は大手家電、自動車メーカーの設備投資の大幅削減などリストラ計画が相次いで発表され、投資マインドが一気に収縮した(10月の建機総出荷額は前年比7.3%の減少)。各建産機メーカーも下期生産計画の大幅な下方修正(30～40%減)を打ち出している。これにより、10～11月にかけての建産機系シャーの受注は急激に落ち込んでおり、ほとんどの社が上期比15～30%減と激減している。機種別にみると、すべてが悪化しているのではなく、大型建機、特に鉱山機械(大型ショベル、ダンプトラック)と建設用クレーンは好調で、暫くは堅調が続くと見込まれる。それ以外の機種は総崩れの状態である。その後建設用クレーンもメーカーの生産計画が下方修正されている模様である。

(重 電)

重電分野はユーザーにより濃淡はあるものの、仕事量は山積みの高い状態が続いている。特に、送電プラントは来年一杯堅調が見込まれ、変圧器、遮断機は好調持続。

また、原発関係は大間原発や米国向け原発物件が来年からスタートする予定で、この部門は世界的な原発建設計画が控えていることもあり、中長期的にみても期待される分野である。

エネルギー関連は、原油安によりロシア・ウクライナ向けが減少しており、先行き一段と悪化しそうで。

(金属加工・鍛圧機械)

設備投資の先行指標である工作機械受注額（日本工作機械工業会）をみると、10月は全体で前年比40.4%の大幅減で、3カ月連続マイナス。うち内需は同43.0%減、輸出が38.2%減とそれぞれ大きく落ち込んだ。国内向けは自動車、家電業界の設備投資抑制、輸出向けは金融危機の影響を受け激減し、下期生産計画を40%以上も下方修正したメーカーも出ている。

(参考) 切板成品の最終用途（平成19年3月出荷分。厚板シャ工組調べ）

- ・ 建築用： 41%
- ・ 土木用（橋梁等）： 11%
- ・ 産業機械用（建機、金属工作機等）： 27%
- ・ 電気機械用（重電等）： 15%
- ・ 輸送機用（船舶、自動車、鉄道車両）： 6%

以上

全国厚板シヤリング工業組合

シヤ業の厚中板在庫と市況実績推移

(H20. 12. 8)

1. 組合員の厚中板在庫推移(自社所有分)

(単位:千トン)

	19/12末	20/3末	6月末	9月末	12月末	21/3末
	(実績)	(実績)	(実績)	(実績)	(事務局想定)	(事務局想定)
在庫量	462	438	446	446	430	420
前期比/量	▲3	▲25	8	0	▲16	▲10
前期比/%	99.4	94.8	101.8	100.0	96.4	97.7

シヤの在庫量は、18年1月の493千トン(在庫率215%)をピークに、以後減少傾向を辿り、同12月末には445千トンまで削減された。19年は5月末の474千トンでピークに一進一退を繰り返しながら、45～46万トンのレベルで安定的に推移した。20年に入ってから漸減傾向が続き、月間在庫率も140～160%と、ほぼ適正水準で推移した。今後は、予想以上の需要低迷から調整に向かうと見られ、減少するとみられている。

2. 厚板定尺と切板の市況実績推移

(単位:千円)

	19/9末	12月末	20/3末	6月末	9月末
定尺	81～83	81～83	114～116	120～122	125～127
切板	97～99	100～102	120～122	135～137	150～152

(注)定尺、切板(ガス)は無規ベース、東京

19年年初以降、厚板定尺、切板市況とも、ゼネコンの過当競争による安値受注などから、ほとんど変動がないまま推移。その間、小刻みなメーカー値上げが行われたにも拘らず、転嫁が進まず、一貫して足踏み状態が続いた。しかし、19年末頃からは母材価格の大幅値上げを受けて、切板市況も反転し、以降上昇傾向を辿った。今後の動向については、市中荷動きの鈍化、一部電炉メーカーの販価引き下げ、輸入鋼材の入着などにより、しばらく模様眺めの展開が続くと予想する見方が多い。

以上